
幻想絶滅危惧種保存委員会

紫藤さやか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想絶滅危惧種保存委員会

【Nコード】

N3601BA

【作者名】

紫藤さやか

【あらすじ】

井上空、能気な看護学生。ある日背中からニョッキリ羽が生えてきて。どうなる私！って、どうにもなりません。ほのぼのラブコメを目指します。

1 チキンラーメンが食べたい

テレビの中では、メタボおじさんが一人、チキンラーメンを食べていた。

人気アニメ映画「崖っぷちのプニヨン」の名場面だ。

そのチキンラーメンがとにかく旨そうなのだ。

私は口を半開きにして画面を食い入るよう見つめていた。

チキンラーメンを食べてみたい。

それが、私の夢だ。

でも…。

「空は鶏肉食べちゃだめだからね。絶対！」

母がそうだったから、私は鶏肉、チキンと名のつくものは今まで避けてきたのだ。

あ、「空」^{そら}っていうのは私の名前。

井上空、18歳、看護学生。

ずーっと祖母、母、私の女系家族だったけれど、一昨年前に祖母が亡くなった。その後、母が結婚し、旦那の仕事の関係で海外へついて行っっちゃったため、現在自宅で独り暮らし中である。

母が出て行った後も、キチンとチキン禁止を守ってきた。

おそらく自分は鳥アレルギーなのだろう。

と、思っていた。

今の今までは。

2 なんじゃこりゃあ

「なんじゃこりゃあ……」

私は、がつくりと膝をつき、茫然としていた。

テレビをみていたら、突然、部屋中に白い羽毛が舞い散った。

テレビの中ではプニョンが旨そうにチキンラーメンの汁を飲みほしていたが、それどころじゃない。

背中がズキズキと痛む。

何が……起こったの？

バサリという大きな羽音に振り向くと、巨大な翼が迫っていた。

ひいい何コレ……って、私の背中から羽が生えているの??

慌てて鏡を見ると、背中から白い大きな羽がよつきり生えていた。

……何じゃこれ？

嘘でしょ……？

ペタリと座ったまま動けない。

着ていたTシャツは無残に背中で破れている。

お気に入りTシャツが……。

そういえば、ここ最近、妙に背中がかゆいと思っていた。

かゆいというか、熱いというか。

部屋の掃除をさぼっていたし、まさかダニ発生??

慌てて布団を干して、掃除機をかけてみたけれど、背中のかゆみは治らない。それどころか、背中が痛い。熱が出るときに体の節々が

痛くなるような、あんな感じだった。

ダニーの仕業ではないらしい。

これは病院に行った方がいいかも、と思っただけれど、健康優良児の私は病院なんて歯医者に五年前に行ったきりだ。内科に行くべきか、外科に行くべきか、はたまた皮膚科に行けばいいのか。どこにしようかな。迷っているうちに、今日にいたる。

まさか、これは、いや、しかし、なぜ、どうしてこうなった？
混乱しながらも考える。

……更に考える。

- 1．自分は鳥と人間のキメラだった。
- 2．先祖代々鳥に呪いをかけられていた。
- 3．神様から天使に選ばれた。

うーむむむむ……。

3はロマンチックだけれど、自分が神だったら、もっとピュアな子供を選ぶと思う。2の鳥の呪いなら、鳥をずっと食べずに頑張ってきた私よりも、カーネ おじさんが呪われるべきではないだろうか。では…1？ 怖い。怖すぎる。

そういえば昔、母にきいたことがあった。

どうして空にはパパがいないの？ と。

「パパは遠いお空に飛んでいっちゃったのよ」
母は遠い眼をしてそう答えた。

パパは死んじゃって天国にいったんだ。

幼いながらにそう解釈していたが……まさか、本当にお空に飛んでいったとか？？

そして、鶏肉禁止の理由は……？
お母様。

もしや、私のお父様は鳥なのでしょうか。
だから、あんなに鶏肉を食べるのを嫌がったのですね。
つて、まさかそんなワケないよね？

考えたところでわかるわけがない。

「どづいつことなの、お母さん！……」
母に国際電話をかけた。

『なにが？ 空、元気にしてた？』
陽気で呑気な声が聞こえてくる。

おのれ、自分だけは楽しく海外生活満喫しちゃって。しかも、旦那とラブラブで。

「羽が。羽が生えてきたのよ。いきなり！！ 背中に……」

私がどなると、呑気な声が返ってきた。

『あらー。パパに似ちゃったのね。成人オメデトー！』

なんですとー？

「ぱ、パパって？ まさか鳥じゃないよね？ 鶏肉食べちゃダメっていつてたけど、それって……」

『はあ？ すつごくかっこいい天使だったわよ。なんとなく翼の生えている生き物食べさせると共食いの気がしちゃってさー。あはは』

あははじゃないよ、まったく。

「て、天使？ その人、もしかして、今も生きてるの？ どこにいるの？ その人も背中に羽が生えてたの？」
勢い込んで聞くと、母は何でもない事のようにいう。

『はえてたわよ。普段はしまってたけど。まさか今頃になって空に羽が生えてくるなんてびっくりねー。でも、彼がどこにいるのかは知らなーい。空がお腹にいるうちにジョーハツしちゃったからね！
大丈夫よ、羽しまつとけば普通に生活できるから。あ、ダーリン、モーニン！ 空、またねー』

無情にもガチャン、と電話は切れた。

酷い。

ひどすぎる。

だーりんもーにん？

母よ、いつから外人になったんだ。娘のピンチよりダーリンですか。まあ、そりゃあ、恋人と上手くいけばいいと応援もしたけれど、しましたけれど、でもちよっと。

よく考えてみたら、私は父のことをまるで知らない。

パパは遠いお空に飛んで行っちゃったのよ。

昔から母はそういつていた。母は一切、父の話をしなかった。だから、私は死んじやって天国にいるのだ、と勝手に解釈していたのだ。

普通、そう思うでしょ？

まさか、本当にお空を飛んでいたとは。

もしかして、自分はハーフなのでは、と思ったことは何度かあった。日本人顔で、母親に似ているが、髪の色や目の色が茶色い。特に後ろから見たときの髪の色がふわふわ加減と頭の形は欧米系っぽくみえるらしい。あくまで後ろ姿限定だけど。それにしても、母が惚れっぽいのは知っていたが、相手が外人ではなく、人外だったとは。

しかもジョーハツっていったい…。

これからどうなるのだ、私。

3 泥棒さんのように

これからどうなるのだ、私。
そう思ったが、どうにもならなかった。

とりあえず、寝ようと思って寝て（羽が邪魔で寝にくい）、とりあえず、起きようと思って起きたけれど、羽は生えたまま。
不幸中の幸いは、看護学校が夏休みに入ったばかり、ということだろうか。

でも、夏休みはバイトの予定だ。
パン屋のバイトの面接は明後日だったはず。

でも、この恰好で外に出るのは…。
こんなに破れたTシャツで外に出るのはちょっとエッチだよな！
じゃなくて。

とりあえず、家中をひつかきまわし、大きな唐草模様の緑色の風呂敷を引っ張り出してきた。
これで、羽をつつめば…。

ものすごく苦勞して羽をスッポリと風呂敷でつつみ、荷物のように結ぶ。

昔話に出てくる絵に描いた泥棒さんのようだ。
鏡の前でお縄頂戴のポーズをとってみる。なかなかいける。
これで、外に出ることにした。

Tシャツの破れた部分は風呂敷で隠れているし。
まずは、ごはんの調達だ。

「あら、空ちゃん、お買い物？ ずいぶんといっぱい買ったのね」
「さっそく、すぐに近所のオバちゃんに見つかる。」

「ハイ。彼氏ができたので、がんばっていっぱいお料理作ることにしたのです」

言い訳も完璧。

特に怪しまれた様子はないな。よしよし。

「お、空ちゃん、家出？」

「ウン、おらこんな街ヤダ。東京さでるだ」

近所の自転車屋のオジちゃんにも見つかるが特に問題なし。楽勝。うしうし。

「おお。それなら、この自転車に乗って東京さ行け。8万円のところ、7万8千円にまけてやる」

オジちゃんを無視してコンビニでカップめん等を買いきこみ、とりあえず帰ることにする。お腹が空いた。早くカップ麺を作ろう。マルシヤン 赤いきつね

普段はお鍋でつくる5個パックのインスタントラーメンがスタンダードだが、今日は奮発。

いろいろ買い込んだ。

これから、どうするかな。

お父さん探すにも手がかり少なそうだよなあ……。いろいろ考えながら歩いていると、パラパラ、と原付が私の横を走り抜け、前で止まった。

「井上空か？」

いきなり原付の男が話しかけてくる。
ヘルメットをかぶっているので、顔がよくわからない。
姿勢が良く、ガタイがいいせいだろうか。原付がやけに小さく見える。

「えと、はい」

誰だっけ、と思いながらも、相手も私の名前を聞いているから親しい人間ではないのだろう、と思い直す。

「乗れ」

男は原付の後ろをアゴで指している。

「……」

カッコイイ大型バイクの後ろならまだしも、原付の後ろってねえ？
っていうより、知らない人についていつちゃ駄目だし。

男がヘルメットを脱いで、私に放った。

ヘルメットが宙に弧を描くその一瞬に、膨大な思考をした。

さっきまで見知らぬ男がかぶっていたヘルメットをかぶれというの
だろうか？ なんとなく汗臭そうで嫌だ。それよりも、男が思った
以上のイケメンなのに驚く。が、そのイケメンがつるっばげなのに
更に驚く。ハゲでもイケメンはイケメンであることにおまけに驚く。
眉毛が凛々しいではないか。鋭い眼光。が、ハゲの年齢はよくわか
らない。ワイルド系に見えるのはハゲゆえだろうか。

思わずヘルメットをキャッチする。

「いいから、早く乗れ。俺は怪しい者ではない」

十二分に怪しいハゲのイケメンがいった。

「早く乗れ。時間が無い」

男が焦ったように言い、空を見あげた。

つられて上を見て、初めて気が付いた。

電線にびっしりとカラスが止まっている。

しかも、カラス達は冷たい眼でじっと私を見ていた。

……なにこれ？

ゾツとして、あわてて臭そうなヘルメットをかぶると原付の後ろにまたがり、男につかまった。ふわりと汗ではないなにかの香りがあった。

パラパララ。

すぐに原付は走り出した。

私がお柄だからかもしれないが、思ったほど原付の後ろは怖くなかった。

どンドン細い道へ、山の方へ入っていく。

良く知っている場所ではあるが、流石に不安になった。

「ねえ、どこへ行くの？」

男は何もいわずに原付を走らせる。

ノーヘル男の後頭部がまぶしい。

どうしよう。

もしかしたら、悪い人なのかもしれない。

若禿かと思っただけけど、もしかしたら、その筋の人なのかもしれない。

マンガでみるヤザの脇役の一人は、何故か絶対にハゲだ。

さっきちらりと見た顔もイケメンではあったけれど、妙な迫力があつたような気がする。ハゲ効果かもしれないけれど。

これは、やばいかもしれない。

4 なにものですか

どんだん人の少ない山道を入れてゆく。

どうしよう。

どこかに売られちゃうかもしれない。若くてぴちぴちの臓器が危ない。

「ねえ、降ろして」

そういったときだった。

ギヤアギヤアと不気味な泣き声が頭上に集まっていることに気が付いた。

見あげるとカラスが黒山のように集まっている。

「空、しっかりつかまっている」

男の音がするかしないかのうちに、そのカラス達が襲いかかってきた。

「キヤア」

ガッ

ヘルメットをつつかれる。

ヘルメットをかぶっていなかったらと思うとゾッとする。

けれど、カラスは無防備な私の背中 風呂敷に包まれた白い羽を集中攻撃しだした。

「痛い痛い痛い」

キキキ。

原付が止まる。

ひいひい、こんな所で止められたらカラスにつつき殺される。そう思った瞬間、男はいきなり天に向かって片手をあげた。とたんにカラスが嘘のように引いてゆく。

…何故？ なんなの？

男は何もいわず、再び原付を走らせる。

私は慌てて男の背中にしがみついた。

何だったんだろう？

舗装していない山道を器用に原付を走らせる。

しばらくして原付が止まった場所は山寺だった。

その山寺に男の頭はとても馴染んでいた。

「なあんだ、お坊さんだったのか。お坊さんなら、袈裟を着るとかしてよ。その筋の人かと思って焦ったじゃないの」

とりあえずはホツとしながら原付を降りる。

山寺に入るのかと思ったけれど、男は原付を手で押しながら、寺から少し離れた「家」らしき場所へ入っていく。完全な日本家屋でもなく、かといって洋風でもない。小ぢんまりとした普通の家だ。瑞々しい緑の蔦が白い小さな花を咲かせ、柱に巻きついていて。山寺も家も人の気配が無く、しんと静まり返っている。が、手入れが行き届いているせいか、荒れた感じはなかった。小奇麗な庭のある寺、

そして少し離れた所にあるひっそりとたたずむ目立たない家。どちらも塀がなかった。

そういえば、小学生の頃、ここに遠足にきたことがある。山をハイキングし、寺の庭でお弁当を食べた。この男はこの寺の住職さんだったのだろうか。もっとお爺ちゃんのお坊さんがいたような気がする。

「袈裟着ていきなりあらわれたら、お迎えが来たのかと思っちゃうだろうが。第一、坊主が女子と2ケツで公道走ったら、いろいろ不味いだろう」

男はいいながら原付を玄関に止めると、ガラツと家の戸を開ける。鍵をかけていないらしい。

「その禿げ頭で、わかる人にはわかつちやうんじゃないの？」
私が言うと、ジロリと睨まれた。

「禿げ頭と坊主頭は違う」
低くよく響く声がキツパリと断言した。

「どう違うの？ その、見た目はそんなにかわらないような気がするけど」
「ねえ？」

「きちんと剃った坊主の頭はつつすら青い。それに、剃るのをやめれば、また髪は生えてくる」

そういわれてみれば……確かに。

「紫外線が直に当たって、知らないうちに毛根がダメになっているかもよ？」

でもつい、余分なことまでいってしまっ。

うっ、と呻く声が一瞬入ったが、男は姿勢を正した。

「禿頭は自分の意志ではない。坊主頭は自分の意志である。故に、たとえ禿でも、坊主頭にする意志がある限り、それは坊主頭なのだ」

そうだったのか！ 勉強になった。

堂々と答えられると正論に聞こえる。

髪が無いのは、人類の進化の過程だとテレビでいっていた。サルから人へ進化するうちに、どんどん毛が無くなるのだとか。坊主にしろ、禿にしろ、たいしたことでは無い。そう思うことにした。

通された日本間にドサリとコンビニ二袋を置く。袋からカップラーメンが転がり出た。

「背中をみせてみる」

男にいわれて、風呂敷をとる。

白い羽は相変わらずそこにある。

「傷にはなっていないな」

点検するように羽をひっぱったり、戻したりしている。この人、人間の背中から羽が生えていても驚かないのだろうか。まあ、何かい

ろいろ事情を知っていきそうだけれど。

「お前、いつもこんな食ってるのか」

コンビニで大量に買い込んだカップめんをチラリとみて、男はいう。

「インスタントラーメンは日本が世界に貢献した食文化なのです！

マルシヤン、世界征服万歳」

胸を張って答えてみる。

堂々と答えれば、正論に聞こえるはず。って、頭をはたかれた。

「ちゃんとしたものを食べ。その羽も胸も育たんだろうが」

男の言葉にコチンとくる。

ちよつと。

もし？

今、なんておっしゃいました？

私は貧相な手羽先ですか？

この男、天敵。

そういえば、名古屋飯も天敵（名古屋名物に手羽先があります）。

「しばらく待っている。飯を用意する」

男はそういつて消えた。

カップ麺でいいのにー。お腹がすいて死ぬ。

畳の上をゴロゴロ転がり（羽が邪魔で上手く転がれないけど）、意識が途切れかけた頃、ご飯がちゃぶ台の上に現れた。

ガス釜で炊いたホカホカのご飯。

温かなお味噌汁。

焼き魚。

ナスの揚げ漬け。

この手作り風のお漬物は何でできているのでしょうか。コリコリして美味しい。

涙を流して完食しました。

ええ、もう、家庭の味に餓えていたんですよ、一人暮らしを始めて

「嫁に来てください」

思わず、今日会ったばかりの禿、もとい坊主にプロポーズしていました。

5 プロポーズ

だがしかし、

「断る」

間髪入れず、拒否されました。

「お前は、俺を妻にするという事がどういう事か、わかっているのか？」

気が付くと、男は私の至近距離にいた。

お香のような香りがふわりと漂う。線香だろうか？ それにしてはエキゾチックな良い香りだ。

ガタイがいいし、禿、もとい坊主だし、妙な迫力がある。

精悍な引き締まった体に、鋭い眼。

微妙なエロ気がちよつと怖い。

「え、えーと…」

すわったまま、後ずさる私を真剣な眼差しが射る。

「寺の経営は厳しい。檀家は少なくなる一方なのに、総本山に年貢は納めなきゃならない。裏でサイドビジネスをして必死に金を稼ぎ、涼しい顔をして寺の庭を箒で掃き、草をむしり、雨漏りを直し、かつ、小学校の先生以上の倫理を求められる。そんな俺を癒し、食わせてくれる（金銭的に）というのなら、喜んで妻になろう。ああ？」

最後の「ああ？」は、恐喝するヤザ風でした。

「ひーん、ごみんなさい。すみません」

すわったまま縮こまり、更に後ずさると、盛大なため息が聞こえた。

「お前の、楽しんで美味しい飯を食おう、という浅はかな魂胆など見え透いておるわ。丁度いい。ここにいる間にその浅ましい根性、叩きなおしてやる」

バツと立ち上がったその姿は仁王様のようでした。

さつさとちゃぶ台の上を片付け始めるので、あわてて手伝う。

「えっと、ここにいる間ってのは…？ あの、何故私をここへ連れてきたのですか？ カラスが突然襲ってきたのと何か関係があるのですか？ そういえば、お名前は…？」

かちやかちやと食器を洗う間、男は無言だった。

家の内装は古くはないが、食器洗い機はないようだ。手早く洗い物を片付け、ほとほとほうじ茶を淹れてくれる。香ばしい香りが漂った。

「俺は、神野武尊じんのたけのだ。その寺の坊主をしている。お前をここへ連れてきたのは、お前を保護するためだ。表向きは坊主だが、裏の仕事もいろいろ請け負っていてな。絶滅危惧種保存委員会の仕事もその一つだ」

目が点になる。

「絶滅危惧種保存委員会？　つまり、私は絶滅危惧種だということ？　だから保護したの？」

絶滅危惧種っていうと、アレだろうか。

トキとか、パンダとか、サンショウウオとか？

「残念ながら、その逆だな。俺が保護する対象は、この地域固有の生物であって…、例えば河童や天狗、妖狐の子孫などがそれにあたる。ここは山寺で、人も少ないから代々そついう仕事を受け継いでいるんだ。お前は完全な外来種だから、駆除すべき存在になる。だから、見張り役のカラスがお前を襲った」

「河童に天狗？　そんなの、いるわけ…」

いいかけて、口をつぐんだ。

自分から羽が生えたのだ。

河童がいてもおかしくは無い。

「もう数も少ないし、血も薄まっている。見た目は普通の人間と変わらないヤツも多い。やつらは縄張り意識が強いから、お前みたいなのがフラフラ歩いていると殺られる。俺も地区担当として、外来種にフラフラされると非常に困る。昨日、外来種特有の妙な気配がしたから、もしかやと思って探していたんだ。お前の事は以前から人外の可能性があることを疑っていた」

人外の可能性って……。

なんですか、話が物騒になってきましたか。

私は駆除されるべきゴツキーのような存在であると？

あなたはアース派ですか、キンチヨー派ですか。

「私はどうなるの？ 保護してくれたんじゃないの？」

男 神野武尊 に縋る。

上目使いで、目を潤ませて、すぎる乙女を無下にできる男はいるのか！？

「お前は、駆除すべき存在だ」

ここにいた！

神野武尊は、あっさりといいきった。

人をゴツキーのように。

「だが、お前だって所変われば保護の対象のはずだ。俺の管轄で外来種の希少種の殺しがあると国際問題になる。絶滅危惧種保存委員会のような組織は世界中にあって、お互いに連絡をとりあっている。親父も今、その関係で海外に行っているんだ。だから、とりあえずは、護符を作って結界張って保護してやるから、中で大人しくしている。海外のヤツに連絡とるから、今後はそっちで面倒をみてもらえ。どこの管轄かしらんが、そのナリはヨーロッパかどっかだろ。ホント、なんで俺の管轄なんだろう。争いことはゴメンだ。迷惑千万だ」

外来種って、私はここで生まれて、ここで育ったんですよ！！

日本語しか話せませんよ。

英語の成績なんて2でしたよ！

英語のマーク試験のときはひたすら2を塗りつぶしてましたよ！全部2を塗りつぶしておけばたいい20点稼げますからね。

迷惑千万って…。

私が何をしたって…のー！
ううう…。

自分には、妖怪のような得体の知れない血が流れているんだろうか。
さすがにちょっと、……だいぶ落ち込んだ。

5 プロポーズ（後書き）

このお話はフィクションであり、実在の団体、宗教とは無関係です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3601ba/>

幻想絶滅危惧種保存委員会

2012年1月14日09時45分発行